

4 水の恵みを求めて～疏水と大農場～

那須塩原市の歴史は、開拓の歴史と言っても過言ではありません。

北西部の山地を除いた大部分は那須扇状地の扇頂部と扇中部に位置し、水利の乏しい痩せた土地で、江戸時代には用水の開削と新田開発が行われましたが、11,000haにも及ぶ茫漠たる原野が明治初頭まで取り残されていました。

明治政府による財政改革の一環で、那須野が原が官有原野となり、国からその土地を借受けた大規模農場が次々と生まれました。これらの大農場は、初めは結社農場として開設されたものが大半を占めましたが、明治20年代にかけてほとんどが解散し、有力な個人の手に移りました。その中で特に目を引くのが華族による経営で、いわゆる華族農場と呼ばれるものが最大時には11を数えました。これら華族農場の存在は国道や鉄道、そして、那須疏水の開削というインフラ整備にも多大な影響を及ぼしました。

那須疏水は、初め運河計画として構想されたものでした。印南丈作・矢板武の度重なる陳情により、やがて灌漑用の大水路の開削が認められ、明治18年(1885)9月に本幹水路16.3kmが竣工、続いて4本の分水路が開削され、開拓地を潤しました。これらの費用は国費で賄われました。

戦後になり、電動ポンプにより地下水の利用が広まり、畑の水田化が進み、水田面積は飛躍的に増加しました。また、戦後の食糧増産を目的として国が進めた開拓団の那須野が原への入植が、現在の酪農産業の隆盛へとつながっていきました。

開拓地の水との闘いは、現在の田園風景や本州一の酪農地帯を生み出した、昭和40年代からの国営那須野原総合開発事業へと続いていきます。

1. 旧村の用水網と幕府の新田開発事業

江戸時代における那須野が原の水利開発には、次のようなものがあります。

臺沼用水

臺沼用水は、慶長年間(1596-1615)に臺沼・折戸・上横林・横林・接骨木の5か村の飲用水路として蛇尾川から水を引いた接骨木掘を起源とします。後に石林村まで延長され、さらに、安永2年(1773)には大田原城下に延長されました。この用水は、大田原藩の管理の下に明治まで維持され、現在も灌漑用に利用されています。

巻川用水

巻川用水は、唐杉・東沓掛・西沓掛・北弥六・前弥六・上厚崎・下厚崎の7か村の飲用水路として請願され、正保4年(1647)に開削されました。取水地は熊川上流の大巻川で、総延長は約18kmに及びました。

長島堀

長島堀は、万治元年（1658）に新田開発を目的として開かれた大規模な用水路で、取水地是那珂川上流の岩崎村でした。しかし、その後取入口が崩落、改修工事が行われたものの、延宝4年（1676）の幕府巡見使により工事の中止が命じられ廃堀となりました。なぜ工事が禁止されたのか多くの疑問が残りますが、堀の規模は大きく、現在もところどころその堀跡を見ることができます。

穴沢用水

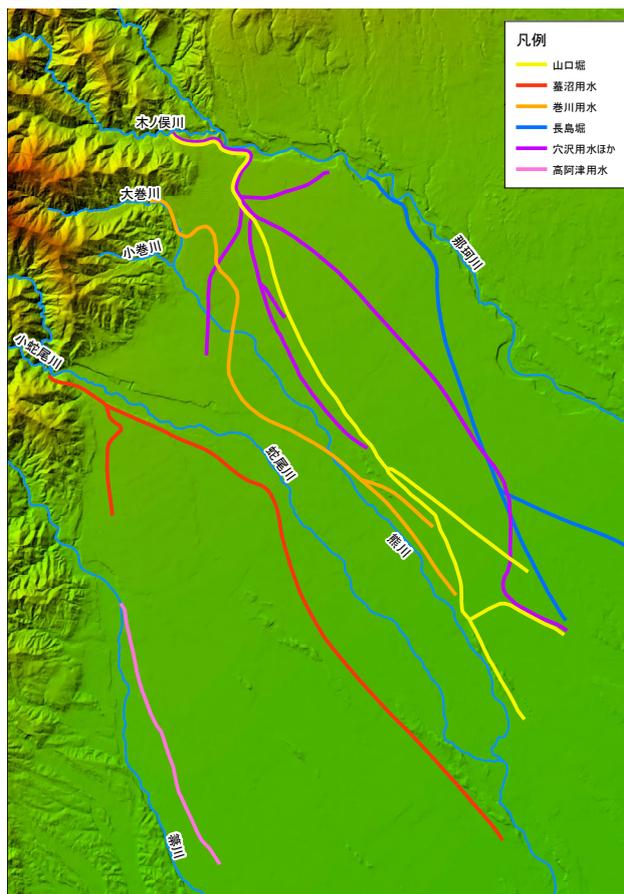
穴沢用水は、宝暦13年（1763）又は明和2年（1765）に、百村の枝村であった穴沢村民が、飲用水を確保する目的で那珂川の支流木ノ俣川から約5kmを自普請により開削したものです。その後、下流の村々の要望により延長し、安永堀・細竹用水・木綿畑用水が、明治に入り厚崎堀が開かれました。その総延長は25kmに及び、それらを総称して現在は旧木ノ俣用水と呼ばれています。

山口堀

山口堀は、寛政5年（1793）幕府代官として赴任した山口鉄五郎によって、新田開発を目的として、穴沢用水を拡張して開かれた用水路です。文化7年（1810）に完成した水路は、穴沢からほぼ直線的に東小屋村に進み、東小屋で吉際村方面と練貫村方面に分岐しており、また、唐杉村でも分岐して下大塚新田に延びていました。総延長は約30kmに及び、この水路によって約210町歩の水田が計画され、当時としては画期的なことでした。しかし、幕末になると管理が行き届かなくなり、文政末期（1829頃）には開田した水田の大半が畑に戻ってしまいました。明治18年（1885）に復活され、現在は路線変更を行って東小屋下流方面で使用されています。

* 1町歩 = 0.991736ha、1里 = 3.92727Km

■ 明治以前の主な用水略図



※『那須野ヶ原の疏水を歩く』などを基に国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを加工して作成

分野	名称
指定文化財	穴沢用水水神祭絵図・穴沢用水普請供養塔・墓沼用水旧取水口・東小屋村全図
未指定文化財	巻川用水・長島堀跡・長島堀取水口・穴沢用水・山口堀・小巻川用水・護安沢堀・墓沼用水・百村光徳寺文書・大野家文書
その他文化資源	百村新田・木綿畑新田・長嶋新田・上大塚新田・下大塚新田・山中新田

2. 日本三大疏水の一つ那須疏水～大農場を潤す水路～

那須疏水は、内務省直轄の国営事業によって開かれたもので、^{あさか}安積疏水（福島県）・琵琶湖疏水（滋賀県・京都府）と並び、日本三大疏水の一つに数えられます。平成 18 年（2006）に建造物として国指定有形文化財に指定、平成 29 年（2017）に追加指定を受け、今日に至っています。

最初の取入口は、明治 18 年（1885）に那珂川の絶壁にトンネルを掘って造られましたが（第一次取入口）、この取入口には水量の調節や土砂の流入を防ぐための開閉施設がなく、大水等によって取入口がたびたび使用できなくなったため、明治 38 年（1905）に約 200 m 上流に取入口を変更し（第二次取入口）、使用されなくなった第一次取入口は予備の水門として石積みが行なわれました。その後、川の流れが変わり、取入口は大正 4 年（1915）に再び元の位置に戻されました（第三次取入口）。昭和 3 年（1928）には水量調節施設の設置や上部へのアーチ型の石積み等の増設が行われ、現在見られる石組みの水門となりました。

昭和 51 年（1976）の那須野原総合開発事業により西岩崎頭首工（第四次取入口）が建設されたことにより、これまでの取水施設は使用されなくなりましたが、当時の状態を良好に残しており、近代における大規模水利施設の取水システムの構造を知る上で大変貴重であることから、平成 18 年度（2006）に国の重要文化財に指定されました。

平成 26 年度（2014）に東・西水門から延びる隧道（東・西隧道）の調査が行われ、調査の結果、両隧道はどちらもほぼ完全な姿で残されていることが判明し、当時の土木技術の高さを示す貴重な証拠であるとともに、既に指定されている旧取水施設と一連の施設として価値が高く、保存の必要があることから、平成 29 年（2017）に追加指定となりました。

那須疏水は、水路の延伸や断面積の拡大などの改修工事を経て、当初わずかだった灌漑面積は、現在 2,600ha へと拡大しており、農家主体の組織が、水の有効利用や合理的水配分や施設の保全などを主目的として適切な維持管理を行っています。これは、水はけの良い土地条件を生かした畑作振興に大きな影響を与えており、水稻以外にも梨、苺などを特産品とする多角的農業を可能にする大規模農業生産地として、人口約 171,000 人を有する地域の食料生産・農業農村などの地域経済発展に大きく貢献しています。こうしたことから、平成 29 年（2017）10 月 10 日国際かんがい排水委員会メキシコ会議において、「那須疏水（堰及び水路）」は世界かんがい施設遺産として認定・登録されました。

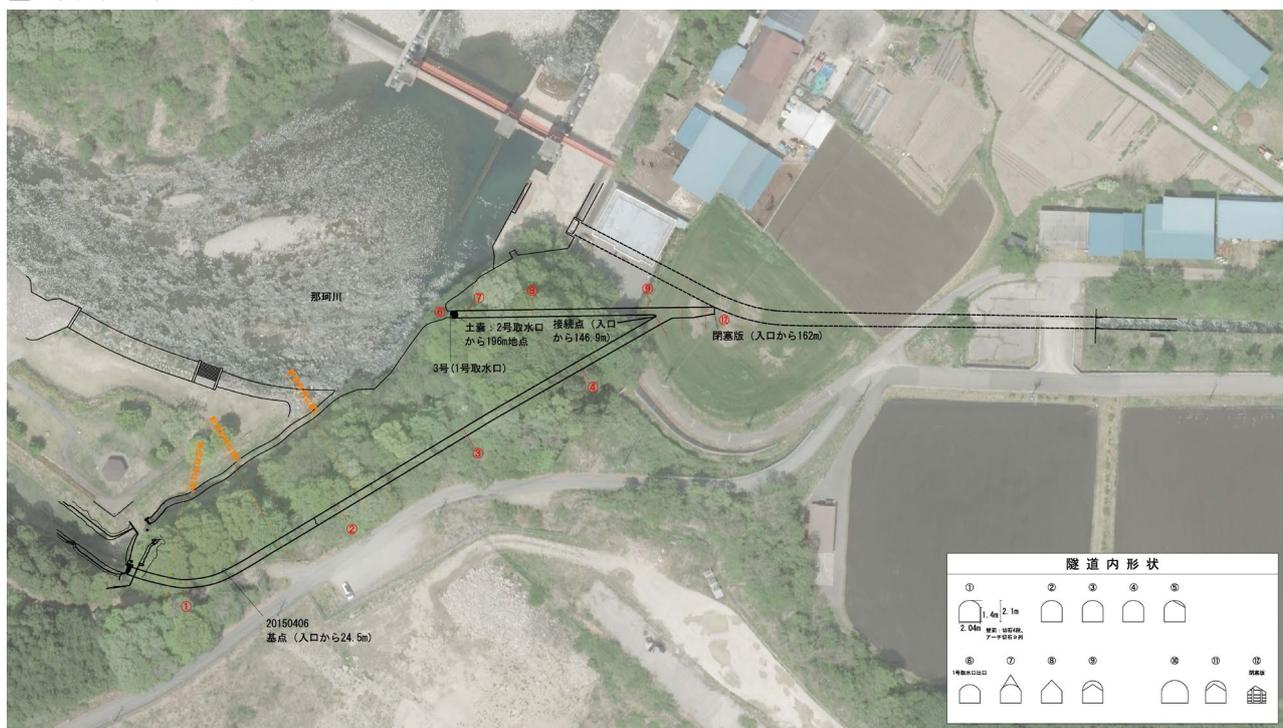
大運河構想

那須疏水の開削は、明治 9 年（1876）に栃木県令鍋島幹が提唱した大運河構想にまで遡ります。これは、鍋島県令が当時進行中の地租改正の推進を図る説明会を行うため大田原に出張したときに打ち出したもので、那珂川から取水し那須野が原を経て鬼怒川に至る遠大な計画でした。

この構想に強く共感したのが、当時第三大区八小区区長であった印南丈作と第三大区三小区区長であった矢板武でした。翌年 1 月には、二人が中心となり 5 日間をかけて運河予定路線の实地踏査が行われ、この結果は県に報告され、これを受け県令自身も後に現地の見分に訪れました。

これにより固まった水路開削計画は、総延長約 45 km、高低差約 319 m、総工費 156,774 円にも及ぶもので、明治 12 年（1879）6 月に請願書として提出されましたが、政府の取り上げるところとはなりませんでした。

■ 那須疏水取入口と隧道



※「那須疏水全体図」(那須塩原市教育委員会)

那須原飲用水路

運河開削運動が進展を見ない中、那須野が原には大規模な開拓農場が次々開設され、水の確保が重大な問題となっていました。明治13年(1880)9月、肇耕社と那須開墾社の関係者より「那須原水路開鑿之儀ニ付願」が栃木県に提出され、これを受けた県は「那須野原飲用水路開鑿之儀伺」を内務卿松方正義に提出し許可されました。この飲用水路の工賃は22,707円の見積でしたが、工事の遅れ等もあり、最終的には分水路の開削費用を含めると57,508円にも上りました。

完成した飲用水路は、細竹から取水した千本松まで約15.2kmの本幹水路と3本の分水路からなり開拓地を潤すこととなりましたが、洪水や崖崩れが頻発し明治17年(1884)には機能しない状態となってしまう、翌年開通した那須疏水にその役割を譲ることとなりました。

那須疏水開削まで

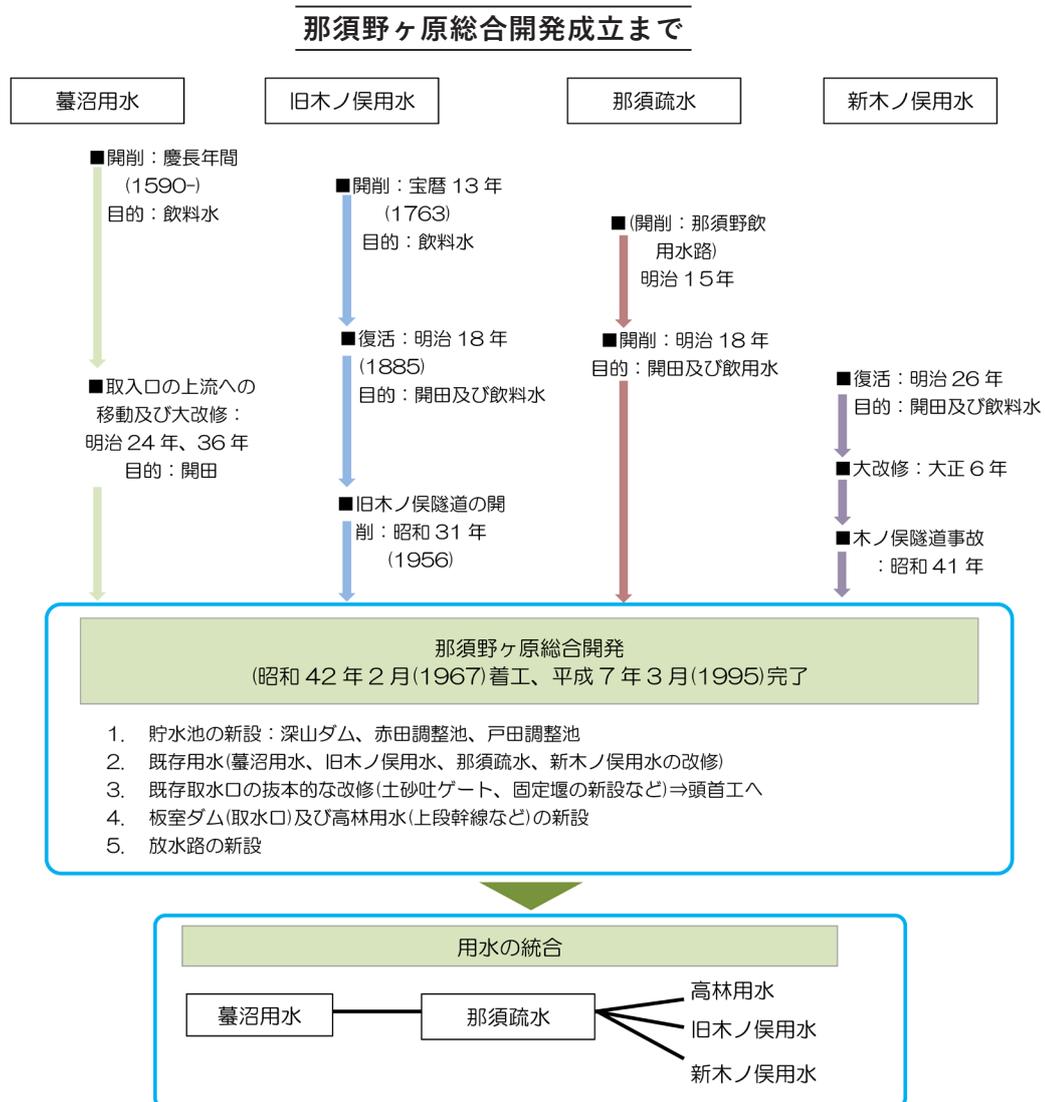
飲用水路が完成間近の明治15年(1882)10月、印南丈作と矢板武は政府に対し運河建設のための測量の願を出しています。翌16年(1883)にも運河開削に関する請願書を提出し、運河建設に対する並々な熱意を見せます。

印南・矢板の二人は、明治16年6月から18年(1885)4月にかけて、計6回、総日数237日、上京して政府の有力者に水路開削の請願を行っています。請願の内容は、水路開削だけではなく、私費による隧道の試削、開削費用10万円の国費下付も含まれました。また、請願の内容は、途中から運河開削から灌漑用大規模用水開削へと変化していきました。

熱心な運動の結果、103人の賛成を取り付け、明治18年4月には国費10万円の国費下付が認可されました。これにより那須疏水開削は国の直営工事となりました。

工事は明治18年4月15日、烏ヶ森の丘上において起工式が行われ、内務省土木局疏水課長南一郎平の総監督のもと5か月という短期間のうちに完成し、9月15日肇耕社事務所において通水式が挙行されました。

那須疏水は、西岩崎から千本松までの本幹水路と4本の分水路から成り、当時の水路延長は62.5km、その後分水から多くの支線水路が開かれ、開拓地を潤しました。本幹水路の水量は250個（1個の水量は1立方尺=毎秒0.0278m³）で、漏水分50個を除いた200個（毎秒5.56m³）を農場面積に応じ配分することとし、分水路の水量が決められました。



※那須野ヶ原土地改良区連合

水車

那須野ヶ原においては、那須開墾社により明治17年(1884)に水路を利用した水車が使われたのが始まりのようです。那須疏水を利用した水車の設置は、明治中頃から認められ地区全体では168基が数えられます。那須疏水を利用した水車は、大正の初期から昭和にかけて増えていき100基を超える数となりました。いずれも精米・脱穀などの農業利用のほか製材や発電目的もありました。実際に稼働した水車は昭和50年頃消えていきました。



那須疏水にかかる復元水車

また、地域を特徴づけるものに、らせん水車があります。この水車は主に北陸地方に発達するもので、鉄芯型と木胴型とがあり、昭和初期に導入され昭和20年代まで脱穀などの目的で使われていましたが、発動機などの普及により次第に使われなくなりました。

旧青木発電所

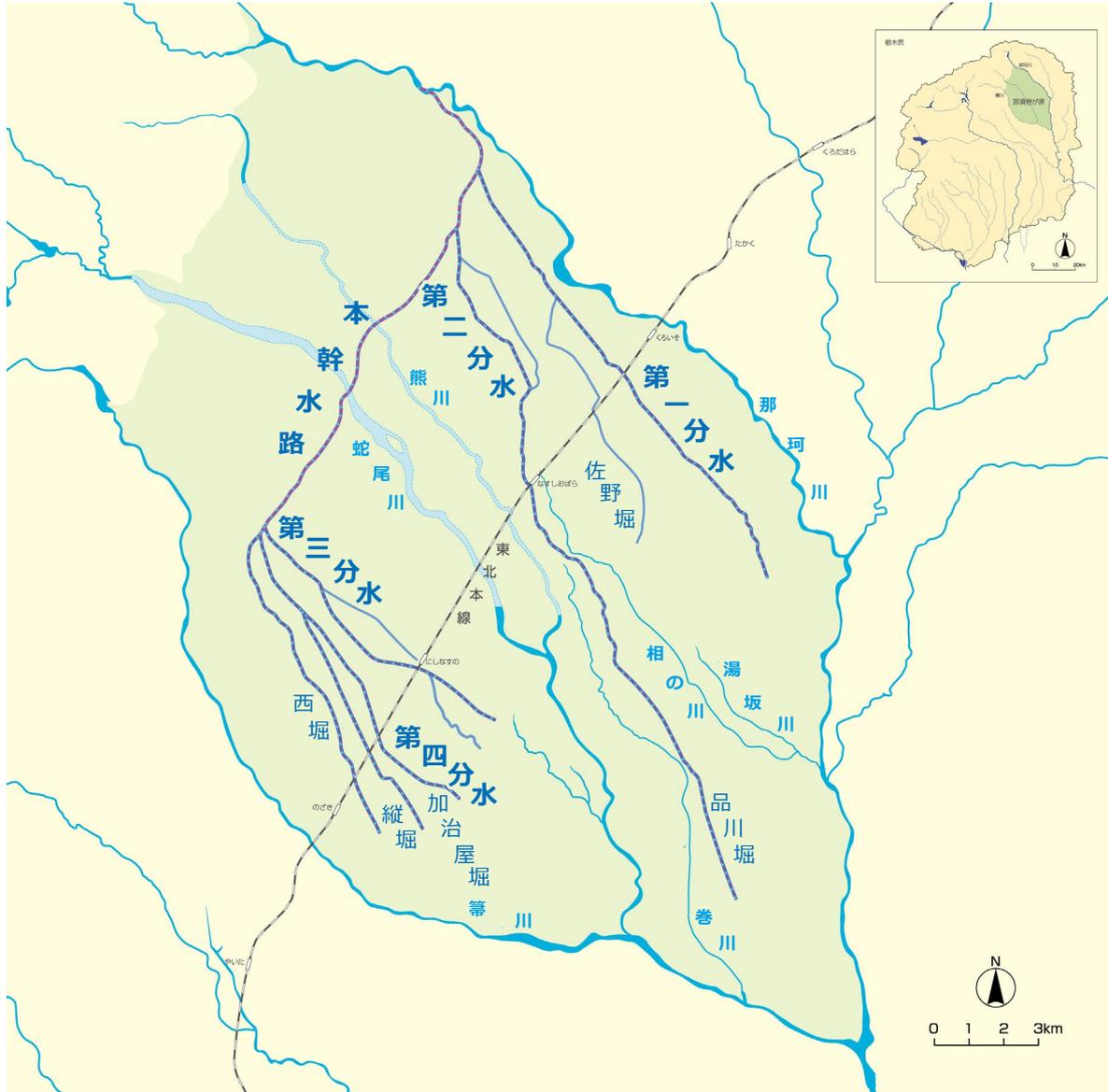
本幹と第2分水の分岐点の上流に設置された2.5 mという低落差による小水力発電で、昭和27年（1952）に送電を開始し、約10年間操業を続けました。当時は全国的にも珍しく、東南アジアからも視察が来るほどでした。

こうした取組が、現在にも受け継がれています。



旧青木発電所（小水力発電）

■ 那須疏水地図

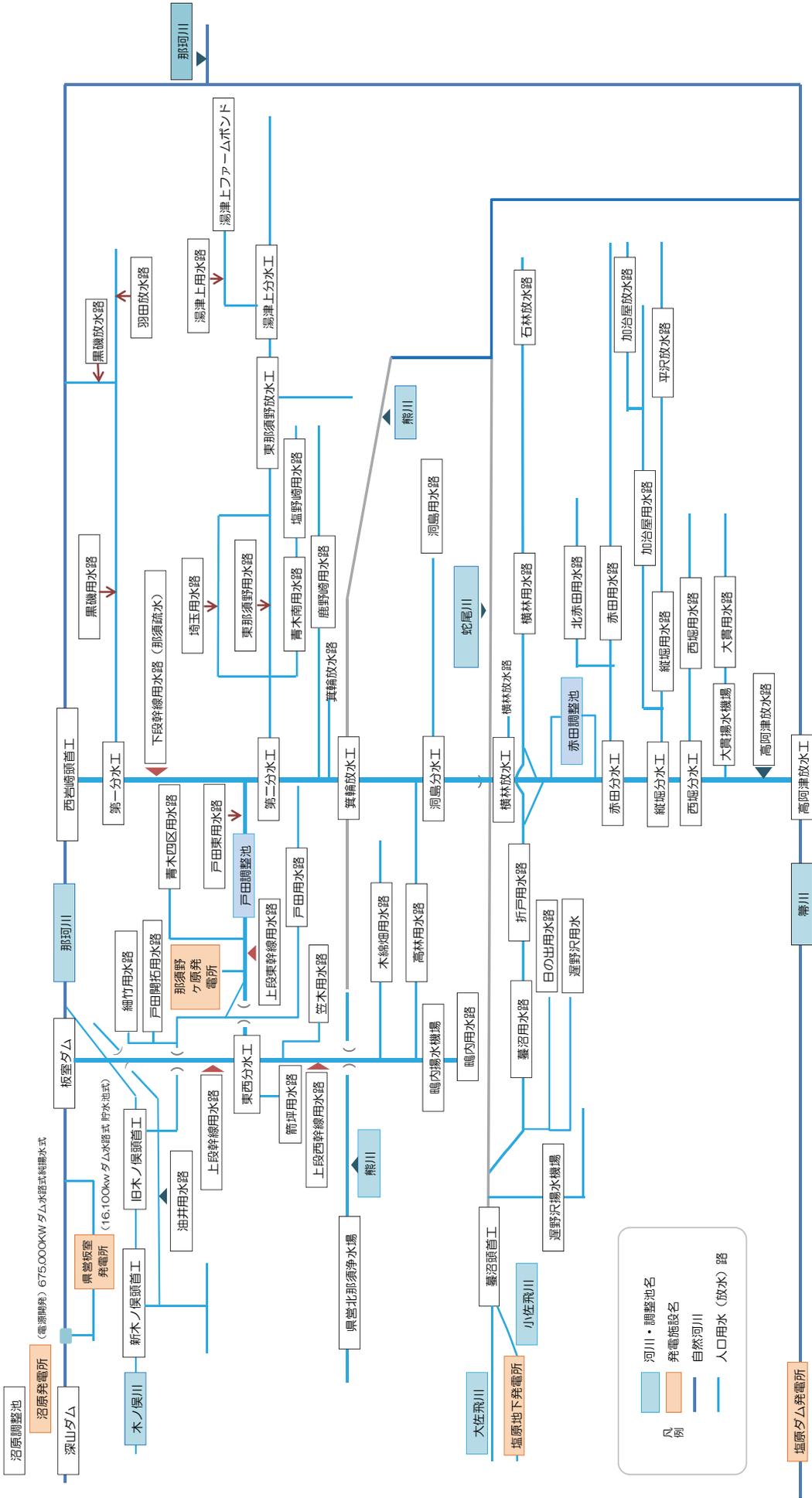


※那須野が原博物館

分野	名称
指定文化財	那須疏水旧取水施設（東水門、西水門、導水路及び余水路、東隧道、西隧道） 附指定（疏水橋、1号護岸、2号護岸、東3号護岸、西3号護岸、那須原疏水線實測全圖、那須原疏水線建築圖綴、那須原疏水工事竣工説明）・那須疏水旧蛇尾川伏越出口・那須疏水関係文書・印南丈作翁屋敷跡・烏ヶ森の丘・常盤ヶ丘・親王台・赤田山・印南丈作の頌徳碑
未指定文化財	那須疏水本幹水路・那須疏水分水路

■ 那須野ヶ原表流水の体系

主な用水・河川の系統



※那須野ヶ原土地改良区連合

3. 大農場による開拓

明治初期の税制改革の一環で実施された官民有区分事業によって、明治11年(1878)に那須野が原11,298町歩が官有地に編入されました。この広大な官有原野は、首都からわずか150kmに位置し、しかも、極めて平坦な土地であったことから、開拓地として注目を浴びることとなり、明治13年から20年を中心に、那須野が原官有原野の貸下げを受けた開拓農場が続々と開設されました。

那須野が原の開拓農場の特徴は、数百町歩に及ぶ大規模なものが多く、中には3,000町歩を超えるものもありました。那須野が原に展開した大規模農場のうち、主なものは次のとおりです。

肇耕社

肇耕社は、明治13年(1880)最初に那須西原の貸下げを受け開設された開拓結社で、農場面積は約1,000町歩ありました。代表は、時の山形県令三島通庸の長男彌太郎でしたが、実質的な代表者は通庸本人だったようです。通庸はこの一帯を見渡せる赤田山に上り、開拓の構想を練ったといわれています。また、赤田山のふもとの北西側にあった赤田沼は、移住人の水くみ場所となっていました。

事業の主な内容は、開墾・植林・牧畜であり、牧畜では農場の北部500町歩を牧場に充て明治14年(1881)で170頭の牛を飼育しました。肇耕社は明治19年(1886)に解散し、農地の大部分を取得した通庸が個人農場である三島農場を設立しました。

那須開墾社

那須開墾社は、印南丈作・矢板武を中心に明治13年(1880)に那須西原で発足した結社農場です。当初の面積は3,000町歩、明治14年(1881)には3,419町歩余となり、那須野が原最大の規模を誇りました。

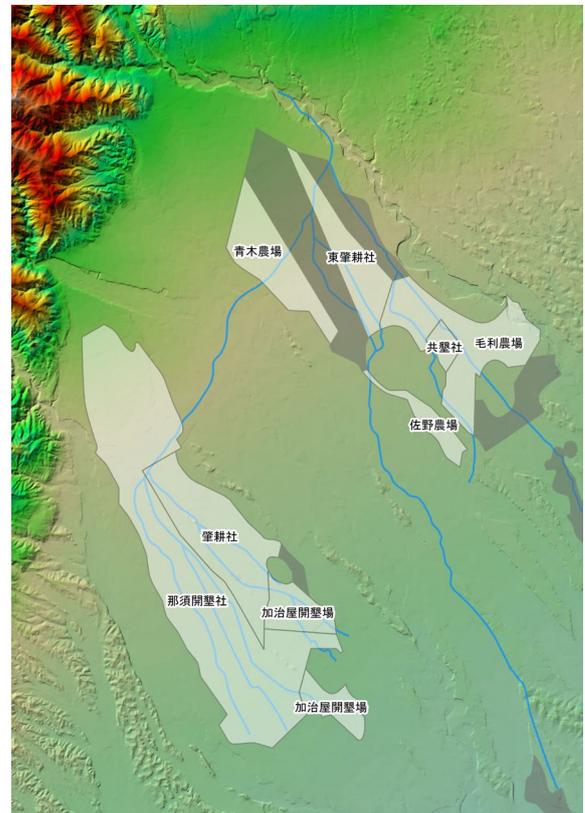
直営による開墾事業は、西洋式大農具の導入により進められましたが、移住人は入植条件として付与された土地を自力で田畑に替える必要がありました。また、牧畜と植林も行われました。明治21年(1888)には移住人分与地・植林地・寺社・公共用地を除いた約1,300町歩が株主に分配され、同26年(1893)結社は解散しました。

加治屋開墾場

加治屋開墾場は、元勲であった大山巖と西郷従道の共同経営により明治14年(1881)に那須西原に開設されました。面積は500町歩でした。主な事業は直営による開墾・牧畜・植林のほか、農場地内に敷設された東北本線の那須駅(現西那須野駅)の開業による住宅地の貸付けや、搾乳による牛乳の販売も行われました。

農場は明治34年(1901)分割され、それぞれ大山農場、西郷農場として経営されました

■ 明治18年頃的那須野が原の開拓農場(主なもの)



※『那須野が原に農場を』(那須野が原博物館)を基に、国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを加工して作成

千本松農場

千本松農場は明治26年(1893)に解散した那須開墾社から1,141町歩を譲り受けた元勲松方正義が経営した個人農場です。農場面積はその後拡大し最大時1,635町歩に及びました。

主に、山林事業と大農法による開墾、牧畜が行われました。農場内には、野火の延焼を防ぐための防火線が5町(約545m)間隔で縦横に設けられていました。山林事業は黒字でしたが、開拓による畑作と牧畜は赤字で、損失の補填は松方家本邸からの借入で賄われていました。

昭和2年(1927)の金融恐慌により2代目農場主の松方巖が頭取を務める第十五銀行が経営不振となったため、個人資産を提供することとなり経営が松方家から離れました。

青木農場

青木農場は、明治14年(1881)にドイツ公使青木周蔵が那須東原の官有原野に設立した個人農場です。当初の面積は582町歩でしたが、拡大を続け最大時1,586町歩にまでなりました。

青木周蔵はドイツ貴族の経営する林間農業を実践し、森林の育成に力を入れました。森林はアカマツと雑木林の混合林で、アカマツは材木として、雑木は薪や木炭として販売され収益を上げました。

佐野農場

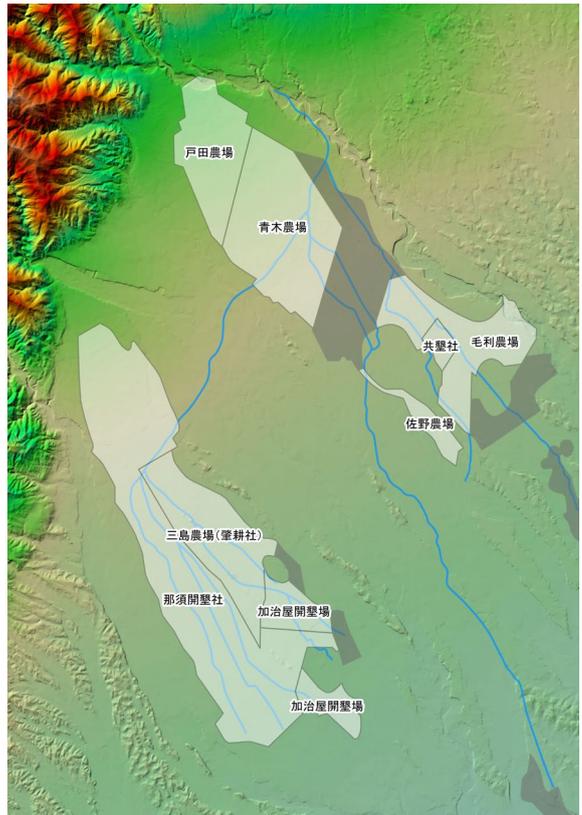
佐野農場は、明治14年(1881)に旧佐賀藩士の佐野常民により那須東原に開かれた農場です。大正14年(1925)時の面積は257町歩であったと記録されます。大正10年(1921)の調査では、農場面積の約30%が、水田及び畑として開墾されており、残りは山林として木材や木炭の製造販売に充てられました。

毛利農場(豊浦農場)

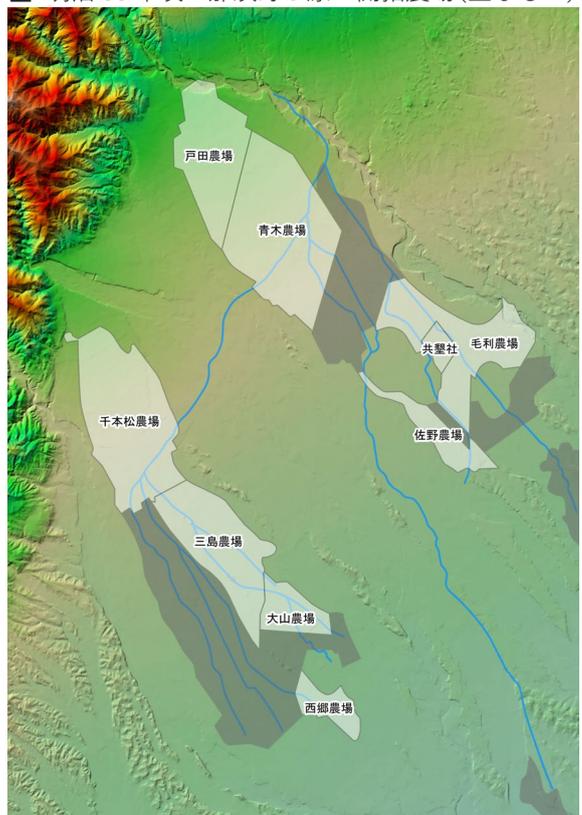
毛利農場は、明治17年(1884)に元長府藩主毛利元敏が栃木県から那須東原及び那須高原の県営那須牧場の貸下げを受け開設した農場です。面積は、那須東原906町歩、那須高原1,000町歩でした。

事業内容は開墾と牧畜で、大正14年(1925)時の記録では、水田8町歩、畑255町歩、牧場779町歩、山林233町歩、原野141町歩で宅地を含めた総面積は1,436町歩となっています。

明治20年頃の那須野が原の開拓農場(主なもの)



明治35年頃の那須野が原の開拓農場(主なもの)



戸田農場

戸田農場は、元大垣藩主戸田氏共が明治20年（1887）に那須東原の最北端部の官有原野931町歩の貸下げを受け開設した農場です。当初は欧米式大農法を導入した開墾を目指しましたがうまくいかず、明治30年（1897）頃からは入植者を募り、林業中心の経営に転換しました。

東肇耕社

東肇耕社は、明治14年（1881）に那須東原の官有原野800町歩の貸下げを受けて開設された結社農場です。東肇耕社と那須西原の肇耕社の株主の多くは重複しており、両社は密接な関係にあったと思われます。東肇耕社の貸下げ地は、明治19年（1886）に青木農場に譲渡されています。

共墾社

共墾社は、士族授産を目的として明治16年（1883）に発足した結社農場で、貸下げを受けた面積は当初580町歩ありましたが、入植した士族が当初の計画に満たなかったため108町歩を残し後は返還されました。

分野	名称
指定文化財	印南丈作翁屋敷跡・常盤ヶ丘・親王台・赤田山・那須開墾社烏ヶ森農場跡・那須開墾社関係文書・印南丈作の頌徳碑・三島農場事務所跡
未指定文化財	三島開墾紀恩碑・熾仁親王植樹記念碑

4. 開拓の労苦を語る「石塚」

蛇尾川の沿川や箒川左岸の台地である三島農場区域や那須開墾社区域の表層土を除く那須扇状地では、礫が混在する層が帯状に分布しており、そのような土地では開墾の際に多量の礫を取除かなければなりません。こうして取り除いた石・礫は畑の隅に積み上げられ「石塚」・「石ぐら」などと呼ばれました。現在では、石塚・石ぐらの石が再利用されたり、埋められたりして余り見られなくなりましたが、広大な那須扇状地を開拓してきた誇りと苦労を雄弁に物語っています。

5. 目をみはる大農場区域

肇耕社の中央には、面積約150町歩の基盤の目状の区割りが形成され今もその姿をとどめています。一区画は50間×60間の1町歩で144区画設けられていました。三島通庸は、そこに駅、郡役所、小・中学校、病院、銀行、警察署、郵便局などの配置を計画しており、都市化を前提としていたことが伺えます。

同じく、那須開墾社においても、明治8年（1875）に始まった関八州大三角測量の時に設定した那須基線をもとに整備された「たて道」と呼ばれる約10kmの直線道路が農場内を貫き、西側に100間（約182m）隔てて並行した直線道路が整備されています。これに交わる横道はおおむね150間（約273m）の間隔で規則正しく並んでおり、開拓地において計画的な区画整理が進められたことが伺われます。こういった人工的な区割りは、千本松農場や青木農場等の開拓地にも共通して見ることができます。

6. 華族農場の果たした役割

近代の那須野が原開拓における農場数は、本州最多を誇ります。さらに、華族に列せられた人たちの農場は19農場に上り、那須野が原は本州最大の華族農場群があった場所といえます。

海外留学体験により、欧州貴族を模範とし、貴族の領主的な性格を意識していた華族は、天皇の藩屏としての役割を担いました。「土地を持つ」「領主になる」という意識を持つ彼らにとって、東京から近距離にある那須野が原はまさにうってつけの場所だったと考えられます。

華族が那須野が原にこぞって農場を開設したことにより、この地の地勢は一変しました。茫漠たる原野に国道や鉄道を呼び込み、国営事業として灌漑用大水路を実現させたのは彼らの影響力であったといえます。

■ 那須野が原農場一覧

No.	農場名	開設年	開設者・経営者	爵位	肩書き	面積 (町歩)	位置	備考
1	肇耕社	明治13年(1880)	三島通庸他			1,037	西原	明治19年解散
2	那須開墾社	明治13年(1880)	印南丈作・矢板武他			3,419	西原	明治21年分割
3	郡司開墾	明治14年(1881)	郡司忠平・磯金平他			50	西原	地元結社農場
4	加治屋開墾場	明治14年(1881)	大山巖・西郷従道			500	西原	明治34年分割
5	漸進社	明治14年(1881)	西山真太郎		馬頭町長	373	東原	明治27年分割
6	那須東原開墾社	明治14年(1881)	吉田市十郎他		大蔵小書記官	985	東原	通称「埼玉開墾」
7	東肇耕社	明治14年(1881)	深津無一他		大蔵主税官	683	東原	明治19年拝借替
8	佐野農場	明治14年(1881)	佐野常民・常羽・常光	伯爵	博愛社社長・大蔵卿	257	東原	
9	青木農場	明治14年(1881)	青木周蔵・梅三郎	子爵	外務大臣・独逸公使	1,586	東原	
10	石丸農場	明治15年(1882)	石丸安世他		大蔵大書記官	233	東原	
11	深川農場	明治15年(1882)	深川亮蔵他		佐賀藩士	254	糠塚原	
12	共墾社	明治16年(1883)	天野武三郎他		宇都宮警察署長	108	東原	
13	品川(傘松)農場	明治16年(1883)	品川弥二郎・平田東助	子爵	内務大臣	226	湯津上原	
14	山縣農場	明治17年(1884)	山縣有朋・伊三郎	公爵	総理大臣	762	伊佐野	
15	毛利(豊浦)農場	明治18年(1885)	毛利元敏・元雄	子爵	旧長府藩主	1,436	東原	
16	長地農場	明治19年(1886)	渡辺国武	子爵	大蔵大臣・福岡県令	101	西原	
17	三島農場	明治19年(1886)	三島通庸・弥太郎・通陽	子爵	栃木県令・警視總監	673	西原	旧肇耕社
18	戸田農場	明治20年(1887)	戸田氏共	伯爵	旧大垣藩主	883	東原	
19	山田農場	明治21年(1888)	山田顕義	伯爵	内務卿・司法大臣	111	黒田原	
20	渡辺農場	明治21年(1888)	渡辺千秋	伯爵	宮内大臣	136	大田原	
21	千本松農場	明治21年(1888)	松方正義・巖	公爵	大蔵大臣・総理大臣	1,650	西原	旧那須開墾社
22	矢板農場	明治21年(1888)	矢板武		下野銀行頭取	360	西原	旧那須開墾社
23	鳥山農場	明治21年(1888)	鳥山貞利		東京府会議員	152	西原	旧那須開墾社
24	大久保農場	明治21年(1888)	大久保利和	侯爵	大蔵省官吏	119	西原	旧那須開墾社
25	佐々木農場	明治21年(1888)	佐々木高行・高美	侯爵	参議兼工部卿	130	西原	旧那須開墾社
26	大島農場	明治21年(1888)	大島高任		日本鉱業会長	190	西原	旧那須開墾社
27	千坂農場	明治21年(1888)	千坂高雅・高節		岡山県令	72	西原	旧那須開墾社
28	野村農場	明治22年(1889)	野村靖	子爵	内務大臣・逓信大臣	375	糠塚原	
29	田嶋農場	明治23年(1890)	田嶋弥三郎		養蚕家	65	西原	
30	鍋島農場	明治26年(1893)	鍋島直大	侯爵	旧佐賀藩主	383	東原・糠塚原	旧石丸・深川農場
31	伊東農場	明治28年(1895)	伊東弥太郎		日本銀行員	160	西原	
32	若林農場	明治30年(1897)	若林謙次郎		肥料商	140	西原	
33	植竹農場	明治32年(1899)	植竹三右衛門		貴族院議員	375	糠塚原	旧野村農場
34	藤田農場	明治33年(1900)	藤田和三郎		薪炭商・県議会議員	842	東原	旧東原開墾社・漸進社
35	高田農場	明治33年(1900)	高田慎蔵		高田商会	190	西原	
36	大山農場	明治34年(1901)	大山巖・柏	公爵	陸軍大臣・元帥	273	西原	旧加治屋開墾場
37	西郷農場	明治34年(1901)	西郷従道・従徳	侯爵	海軍大臣・元帥	246	西原	旧加治屋開墾場
38	細川農場	明治36年(1901)	細川潤次郎	男爵	枢密院顧問官	68	西原	
39	甲子農場	昭和3年(1928)	甲子不動産			190	西原	
40	栄農場	昭和13年(1938)	村尾敏一		村尾汽船社長	229	西原	

※『那須野が原に農場』（那須野が原博物館）

※ 網掛けは華族農場

7. 華族の別邸

市内には、華族農場の名残ともいえる洋風別邸がいくつか現存しています。時の政府高官として多忙な毎日を送っていた農場主たちは、公務の合間を縫って視察と休養を兼ねて、自身の農場を訪れたのでしょう。そのために建てられた別邸は、農場主の嗜好を反映し独特の存在感を放っています。

ドイツ翁と呼ばれた青木周蔵の別邸は、ドイツ様式の工法で建てられています。白い蔦型のスレートと度重なる増改築により形づくられた複雑な造形が見る者を圧倒します。

松方正義が建てた別邸は、南に全面ガラス窓のサンルームを配した総2階の建物で、1階の壁は大谷石で飾り、石造建築風の重厚さを漂わせています。

大山巖の別荘は、農場内で焼かれた煉瓦を使用し積み上げた堅牢なたたずまいの平屋で、その隣に「薩摩屋敷」と呼ばれる和館を配しています。

これらの建物は、この地が開拓の地であったと同時に、近代日本における避暑地の先駆けであったと考えられます。



旧青木家那須別邸



松方別邸



大山記念館洋館

分野	名称
指定文化財	旧青木家那須別邸・乃木希典那須野旧宅・大山記念館洋館・旧塩原御用邸新御座所・大山参道のモミジ並木・乃木神社の樹林・品川弥二郎の旧念仏庵
未指定文化財	松方別邸・大山別邸和館・開拓関連資料・華族邸宅関連調度品等資料一式・三島神社・毛利神社・乃木神社・佐野天満宮・母智丘神社・鍋島農場解放記念碑・下永田の「赤レンガ」建物
その他文化資源	東三島・西三島・三島・永田町・千本松・四区町・三区町・二区町・一区町・北二つ室・二つ室・下永田・埼玉・共墾社・豊浦・渡辺・佐野・青木一区など